

分科会②「特別支援教育と生徒指導」 ～協議の柱：社会参加に向けた指導・支援～

前半：小泉氏、小原氏、小室氏の3者による協議

より具体的な生徒指導について、各校で最近の起きた問題は・・・

檜山北高・小泉氏

- ・男女関係のもつれがLINEで広がる。高校から携帯を持ち始める。携帯（スマホ）などに対して注意力がないままに使用し、大きな問題に広がる。
- ・気持ち（精神面）が幼い。思うがままに行動する。自己制御できない。以上2点が本校の課題
- ・9割9分携帯を持っている。親からの迎えが半分いるので、必要な物ではある。
- ・使い方が悪かったら、自分の責任で禁止になると、本人たちには伝えている。

今養・小原氏

- ・悪質な画像、不適切なやりとり（性にかかわる問題）が携帯を通じて起きている。
- ・本校でも、懲戒を取り入れている。手探りな部分もある。
- ・過去は学年主体で対応し、懲戒規定がなかった。
- ・普通高校にいるような生徒が増え出したところ、問題も増え始めた。
- ・喫煙、窃盗、対教師暴力が目立ち始めた。
- ・H24から、学校としての体制作りを行い、H25懲戒規定を稼働。内規はH26から。
- ・協力体制に基づき、関係者で会議を開き、原案を作成し指導を行っている。
- ・檜山北高校と違う所は、自宅謹慎の前に学校内での指導を行う姿勢。
- ・昨年度は問題行動件数が増加した。15件（14名）が停学処分懲戒を受けている。
- ・男女の関係に関しては、昨年度は厳しい状況（問題）が続いた。
- ・男女問題に関して歯止めが効かない。いきなり盛り上がり最後までいってしまう事例が多い。これらの理由により、男女関係に対する指導が厳しい。
- ・今年はまだ案件が少ない。
- ・生徒指導の案件が、より高校の問題と直結している。

指導上の高校と特別支援学校でのやり方の違いについて・・・

今養・小原氏

- ・指導のめどをたてる。原案は会議だが、具体的な指導支援は担任学年と相談しながら取り組んでいる。
- ・高校は1本の柱のもとに、各先生方が指導していく。
- ・障害によるつまずき、事後をしっかりと見ること。

障がい特性を意識した指導について。基本的な考えとは・・・

今金中・小室氏

- ・人間として社会に出て行くので、社会的なマナーをしっかりと早い段階から指導していく必要がある。
- ・心理的な部分での病気もあり、その子のきもちを受け取るカウンセリングマインドが重要。定期的に。根気をもって取り組む。

- ・駄目なものは駄目と教えるのと同時に、その子のメンタル障害に応じたケアも重要。
- ・実態把握。本人を知る意味でも、アセスメント、バウムテスト、エゴグラムなどの活用。しっかりと押さえを持って取り組むことが必要。
- ・感情をぶつけてくるほうがまだよい。時間はかかるが、長い目で向き合う事例は多い。

学校の職員の移動や環境上、保護者支援、地域支援が重要。そのポイントは？

今金中・小室氏

- ・今金町は関係者が集まり、会議を開くシステムやフォローができていく体制がある（ケース会議等で）。
- ・学校側からのフォローも当然重要。

保護者とののかかわりや支援、申し渡し時のポイントしていること

檜山北高・小泉氏

- ・状況説明、今後どのようにしていくかの説明。正確な状況説明。
- ・よくしていくための指導であり、協力して行っていくことを必ず伝える。
- ・保護者の変化はあまりない。「なんで？」「どのくらいで？」が多い。生徒の方が理解している。

今養・小原氏

- ・保護者から「何で？」は少ない。社会自立を意識しているので、理解を示してくれる。悪いことは悪いと伝えてくださいと言っていただける。
- ・言葉に対してはとても敏感（懲戒、停学などの言葉）。
- ・言葉を吟味して話しをしている。生徒が今後成長していくための時間、きっかけであると伝えるように心がけている。
- ・保護者によっては、どうしてよいかわからないと訴えることもある。地域相談支援の活用も促し、実際に活用されている。（外部機関との連携も）
- ・保護者が子どもと向き合える時間になったと、言っていたケースもある。

最後に・・・

特性を押さえた上で、なぜ問題行動が起きているのかという視点。善悪の区別も含め社会に大人として送り出す重要性を認識して育てる視点。これらのことがとても重要である。

後半：フローワからの意見をもとに協議 ～事前のアンケートから～

フロアより

- ・スクールバスのイスや窓ガラスが割れた。同じ失敗（問題）を繰り返さないために。懲戒に値するような事例だが、学校による対応の違いがある。各学校の取り組みとは？

今金中・小室氏

- ・今金町は、見た目は落ち着いているが、携帯トラブルは多い。陰湿になっている傾向がある。勉強会を行っているが気休めや限界がある。粘り強い指導支援。むきにならずに取り組んでいく重要性。

檜山北高・小泉氏

- ・SST。指導部通信。警察講義。即効性はないので、地道に。指導部通信とは、長期の休み時に、そのときに問題になっていることをテーマに（今回は携帯について）

今養・小原氏

- ・つぶやき WEEK という実践を通して、生徒全員が教師に「つぶやく」ことができるようにして、面談を行っている。目安箱「スケッチボックス」の活用。生徒の意見を書いて入れてもらう。生徒会からの回答あり。不安要素があるときは問題が起きる前に情報共有。子どもたちが、自分自身で学校を良くしていく心、気持ちになるような仕掛け。

フロアより

- ・保護者が知的障害。その保護者の青空学級児童は登下校の際、突然に手をつなぐ。傘で叩くなど問題を起こす。被害者の親から聞くケースが多い。その都度指導しているが、別な形で問題が起きる。保護者の問題意識が薄い。

今金中・小室氏

- ・発達支援センターとの連携。外部機関との連携。サービス利用の検討。

檜山北高・小泉氏

- ・担任以外の管理職も含め、複数での対応が必要。根気、継続。

フロアより

- ・特別支援学級。双子。教室でボール遊び、けんか。家庭での雰囲気の影響で学校でも起こる。母親も困り果てている。指導を継続しているが、なかなか振り返りができない。

今金中・小室氏

- ・スペシャルスキルカードなど、写真、イラストなど、場面に即した指導。

今養・高田氏

- ・短い言葉で。

フロアより

- ・通常学級。辞めていく生徒に対するフォロー。退学後のフォローについて。

檜山北高・小泉氏

- ・退学は多い年で、3～4名。冷却期間、地域とのつながり、フォローが大切と痛感している。担任がフォロー、アポを取る人が多い。

今養・小原氏

- ・不本意入学。関わりたくない、関わってほしくないケースもある。ケースバイケース。担任裁量で行うケースがある。

今金中・小室氏

- ・通院している病院との連携。

フロアより

- ・保護者を支える視点（周囲に支える人がいない）→保健師さんとの連携について。

今金中・小室氏

- ・5歳児検診からのかかわりがはじめにあった。
- ・こまめな連携。保護者も巻き込みながら、情報共有もしながら、保護者を安心させる（巻き込む）。
- ・母親同士と保健師との学習会開催（孤立しないような工夫、支援）。

今養・高田氏

- ・保護者の悩みを定期的に聞く。（振り返りが必要）。

今金中・小室氏

- ・今金でない場合は、受け身が多い。来れば受け入れるスタンス。立場を使って保健師から活動するように伝えている。ある地域では、保健師の移動があり、繋がりが難しい。

フロアより

- ・放課后面談（個別指導）の人数が増えつつある。人数の関係上、こちら側の手が回らなくなるのが実状。より効率のよい面談（学習）方法はあるのか。

フロアより回答

- ・面談をする期間を明確化。気持ちの準備が大切。
- ・担任、学年体制で行う。学校体制では、習熟度別で行っている。個別面談は大変だと認識している。
- ・年2回ほど面談。それ以外は、担任、学年で対応。朝学習で対応していることもあったが、個別的な対応であり、学校体制ではない。

今金中・小室氏

- ・人が少ないのが現状。永遠の課題でもある。

今養・小原氏

- ・特別支援の学校でも、時間が足りないと感じる。

フロアより

- ・生徒指導に関して、中学校ではそこまで問題行動が表面化していないと思う。本校の実態を聞いて驚いた。なぜなのか？

今養・小原氏

- ・今の高等養護学校の課題は生徒指導である。風通しが良いから見えてくるところが表面化している。こちらのスタンスとして、問題に対する指導をしっかりとしつつ、原因は何かも考えて

取り組んでいる。

最後にパネラーから

今金中・小室氏

- ・関係機関とつながることが大事。情報共有をより大切に。

檜山北高・小泉氏

- ・自分自身の実践を振り返る良い機会になりました。

今養・小原氏

- ・どの学校も課題を抱えている。お互いの協力を大切に。

3 成果と課題

平成26年度特別支援教育研修会の成果と課題には、どのようなものがあるだろうか。目的と運営について、参加者と本校職員のアンケート結果をもとに示す。

(1) 目的の成果と課題

目的は2つ。「1. 分科会や講演を通して「特別支援教育」「キャリア教育」「生徒指導」の各観点から教育実践を見つめ直す」と「2. 児童生徒が社会自立を目指す上で必要となる力について整理するとともに、参加者全員のスキルアップを図る」である。

① 目的1について

参加者は小中学校、高等学校、特別支援学校と多岐にわたる場所で日々指導に当たられている方々であった。講演と分科会では、それぞれの校種の実践や悩み、情報を聞いたり話したりする機会となっていた。校種ごとに異なった取り組みや悩み、意見の違いが出てくる。また似たような内容も出てくるだろう。例えば、中学校の方が高等学校の実践を聞く。小学校の方が中学校の実践を聞く。このことにより、参加者が共感し、知識が増え、視野が広がり、課題を解決し、参加者各自の学びにつながったことが成果であった。

逆に、分科会で多様な意見を聞くことができて、バラバラで系統的ではなかったなどの意見があり、分科会の運営の難しさが課題となった。

② 目的2について

参加者がどのように力を整理し、スキルアップを図ることができたかをはっきりと具体的に述べることは難しい。ただ、講演や分科会で、実践を聞き、話をすることで、参加者自身が参考になったり、勉強になったことはアンケート結果からも把握できる。また、学んだことをもとに、積極的に指導に当たるといった意見も見られている。それぞれが学びになった物を持ち帰り、自己の実践に当たられることが期待される。

(2) 運営の成果と課題

檜山管内における唯一の特別支援学校であり、地域の特別支援教育を推進するセンター校としての役割のひとつとして、このような研修会の実施は欠かすことができない。重要な業務である。実施し、参加者が学びを共有することで、一定の成果はあったと考える。ただし、運営としての課題は2つあげられる。

1つめは、主題設定である。ここ3年ほどは、キャリア教育をテーマにして研修を行ってきた。しかし、実際には、キャリア教育というマクロな部分だけではなく、この檜山管内地域のニーズを生かしたミクロな視点での主題設定も必要となってくる。本校の校内研究のテーマとの関連も含めながら検討していく。

2つめは、研修会の進め方である。

地域のニーズに即した内容を視野に入れて研修会の内容を考えるに当たり、講演と分科会形式という流れだけではなく、講師と多く話す時間を設けることや、ワークショップ形式なども考え

られる。参加者に「学びとなった」「来てよかった」とさらに思ってもらえるような、研修会を考えていきたい。

(3) 参加者の概要

参加者数は、外部から 32 名、本校職員が 36 名、講師 4 名の合計 72 名であった。

資料 2

今養版キャリアプランニング マトリックス

今養版キャリアプランニングマトリックス（試案・平成25年3月現在）

指導観点	観点の中身(解説)	指導の柱	1 学 年 段 階 (学びを通して気づく・知る)	2 学 年 段 階 (将来を意識し、自ら学ぶ・行動する)	3 学 年 段 階 (将来を見据え、自ら学ぶ・行動する)
心と体	・元氣 ・体力 ・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康	●健康でたくましい心と体の必要性に気づかせ、身につけることができるよう指導する。	●自らの心と体の変化をとらえ、心身の健康を維持できるよう指導する。	●卒業後の生活を見据え、自ら心と身体の健康が保てるよう、望ましい生活を組み立てる力を育てる。
		基本的生活習慣の確立	●生活リズムを整え、望ましい食生活や規則正しい生活ができるよう指導する。	●自立した生活を意識し、望ましい生活習慣を身につけることができるよう指導する。	
自己理解	・自分の長所や課題を見つめる力 ・他者からの評価を受け入れる力	長所・課題の理解	○自分の長所や課題に気づくことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を受け入れるとともに、自己肯定感を持つことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を踏まえて、自分の気持ちや考えをしっかりと持ち、自分らしさを持てるよう指導する。
		他者からの評価の受容	○他者から受けた評価に、耳を傾ける気持ちを育む。	○他者から受けた評価を受け入れる気持ちを育む。	○他者の気持ちや考えを理解・尊重し、自分のあり方・生き方にいかすことができる力を育てる。
職業	・責任感 ・向上心 ・自立心 ・実行力 ・職業理解・分析能力 ・働く意識 ・働く喜びを知る ・将来の目標を立てる力 ・将来の目標に向けて課題を解決する力	働く態度・能力	●与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組めるよう指導する。	●手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら、与えられた仕事に取り組む事ができる力を育てる。	●自ら仕事の工程や課題を理解し、効率よくやりとげる力を育てる。
		職業理解	●身の回りのいろいろな仕事について、社会との関わりやその仕事に求められる能力などを考える力を育てる。	●自分の適性がわかり、将来の職業について具体的に考えることができる力を育てる。	●職業生活の中にやりがいや生きがいを見いだし、前向きに自己の未来を設計する意識や社会の一員である自覚を育てる。
自己内省	・集中力・持久力 ・持続力・忍耐力 ・積極性・自主性 ・真直さ・忠実さ ・負けず嫌い ・前向きである ・様々な物に興味を持つ ・謙虚な心 ・反省の心 ・感謝の心	物事に対する意欲	○時間いっぱい集中して学習する意識を持ち、目標を達成しようとする気持ちを育む。	継続	○自らの課題解決に向け、素直な気持ちで物事に取り組む姿勢を育てる。
		課題を解決しようとする心	○自主的・積極的に活動に取り組む大切さを知り、自ら努力を続けようとする気持ちを育む。	継続	○他者への感謝の心を持ち、それを表現する姿勢を育てる。
知識・技術	・公共交通機関の利用 ・金銭管理 ・職業に応じた知識・技能 ・読み書き計算 ・常識 ・マナー ・身だしなみ ・礼儀 ・ルール ・整理整頓	社会の仕組みなどの知識・技術	●集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる。	●社会のルール、マナー、礼儀などを、状況に応じて使うことができる生徒を育てる。	●社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身につけ、社会の一員として生活できる力を育てる。
		読み書き計算などの知識・技術	●金銭管理や読み書き、計算などの生活に必要な基礎的知識が身につくよう指導する。	●身につけた知識を、日常生活で生かすことができる生徒を育てる。	●身につけた知識を応用し、社会の中で生きていく力を育てる。
コミュニケーション	・声の大きさ ・あいさつ・返事 ・報告・連絡・相談 ・言葉遣い ・話す・聞く ・協調性 ・人づきあい ・他者理解	自分から相手に発信	○場や状況に合わせた声の大きさを、あいさつ、返事・報告ができる力を育む。	○あいさつや返事、簡単な敬語を使うなど、社会生活に必要な意思表現能力が高まるよう、日常的に指導する。	○その場に応じたあいさつ、返事・報告をする力と、相手の人権を尊重するよう適切な言語能力を育てる。
		相手の話を聞いて判断	○相手の話を最後まで落ち着いて聞くことができる力を育む。	○必要な支援を他者に求めることができる力を育む。	○解決出来ない問題に対して、地域の中で適切な相談相手を選んで支援を求める力を育てる。
応用力	・判断力 ・判断力 ・理解力 ・計画性 ・意思決定 ・柔軟性 ・効率的 ・情報収集 ・情報活用 ・取捨選択能力 ・自己統制力 ・危険回避 ・協力 ・余暇の充実	意思決定	●TPOに応じて何ができるか、何をすべきかの選択肢を与え、その意味を理解させ、選択していける(判断する)力を育てる。	●TPO、自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をできる力を育む。	●卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活において、自らの意思と責任によりよい選択・決定を行うことができる力を育む。
		将来設計	●目標を達成するためには工程があることを理解させ、与えられた計画や工程に取り組ませ、習慣化できるよう指導する。	●家庭生活・学校生活に必要な習慣の確立を目指し、職業生活に活かす力を育む。	●社会生活・職業生活等に必要な習慣の形成に向けた指導をするとともに、余暇の活用等を図り、前向きに自己の将来を設計する力を育む。
感性	・発想力 ・表現力 ・感受性	情報活用	●学校・寄宿舍・地域社会の中には様々な活動があることを、体験を通じて理解できるよう指導する。	●自らの興味のある活動や職業等に関して、様々な情報を収集し、自ら活用できる力を育成する。	●希望する進路の実現に向け、卒業後の生活に必要な情報収集・取捨選択し、自ら判断して活用できる力を育成する。
		人間関係	●集団活動に参加し、他者と協力することができる力を育む。	●集団において自分が果たす役割を理解し、周りと協力することができる力を育む。	●集団の一員として自ら役割を理解し、協力していくとともに、その役割を遂行していく力を育む。
感性	・発想力 ・表現力 ・感受性	感受性	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。	継続	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを理解した上で、柔軟に物事を受け入れる心を育む。
		表現力	○真・善・美として感じたことを言葉・造形・音楽・行動などで表現できる力を育む。	○真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて言葉・造形・音楽・行動などで適切に表現できる力を育む。	○卒業後の豊かな生活を目指し、真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて適切に表現できる力を育む。

学校教育目標の達成

希望豊かな判断力と行動力を持つ生徒を育てる

このマトリックスは、平成24年度の校内研究において、研究推進委員会、学年部会、学科部会が検討を重ねて、最終的に結果まとまった完成版です。

これは各学年段階の指導方針として捉えていただき、これをもとに授業・指導・支援していくよう、また必要に応じて保護者等に説明していただくようお願いします。

しかし、日頃の教育実践等により、再度検討が必要になることも考えられます。そのため「試案」としています。検討の必要性を感じたら、研究推進委員会に連絡をお願いします。

あ と が き

特別支援教育において、生徒一人一人の将来的な社会参加・自立を目指した「生きる力」の育成（キャリア教育の充実）は教育活動における最大の目標の一つであることは言うまでもありません。また、これからの時代、特別支援を必要とする児童・生徒の増加が予想されており、教育現場に求められる要望や要求も多岐にわたってくると考えられます。

今後の特別支援・高等部教育の在り方を考察しながら、本校においても、今年度も引き続きキャリア教育を中心としたさまざまな取り組みを行ってきましたが、本号には、その研究・研修、実践、報告等が収録されています。

このような本校の取組を校内的なものとして共有するだけではなく、校外的にも積極的に情報発信しながら、保護者や関係機関の皆様との連携・協力のもと、学校の様子や取組、実態等を共有しながら本校教育活動を推進していくことの必要性を強く感じています。また、これからの厳しい時代を生徒一人一人がたくましく生き抜けるよう、夢や希望を持ちながら充実した社会生活が送れるよう、我々は日々の教育活動において強い使命感と責任感を持って臨まなければなりません。そのためには、我々一人一人の、知識、支援・指導力、人間性等、資質・能力の向上が必要不可欠となります。今後も、校内外を含めた、教職員一人一人の研究・研修活動の充実を図っていきたいと思います。

特別支援教育の一端を担う学校として期待され、信頼される今金高等養護学校であるために、この研究紀要を皆様に御一読いただき、御意見・御指導等いただければ幸いです。

平成27年3月

北海道今金高等養護学校教頭

佐 藤 公 人

共 同 研 究 者

学校長 高嶋利次郎
教 頭 佐藤 公人
事務長 五十嵐裕昭

<教務部>

1 学年 泉谷 好子 、 橘 晴美 、 上村 幸教 、 小林 和幸 、 佐々木真由美
金子 亘喜 、 山田みゆき 、 初山小枝子 、 矢倉 一 、 太田 雄大
石黒 駿太 、 山口 晋 、 加藤 大輔 、 小林 睦美 、 出村 朱美

2 学年 田中龍右ヱ門 、 中島 朋之 、 阿部 昌弘 、 小原 雄一 、 渡邊 雅都
鈴木 貴史 、 鈴木 絢子 、 村瀬はるな 、 工藤 大地 、 後藤 倫弘
高橋 詩織 、 吉本 香奈 、 近藤 千晶 青山 未帆

3 学年 国府由香利 、 祐川建一郎 、 高田のぞみ 、 近藤 和也 、 野呂 篤志
岩城 研太 、 鐘ヶ江真知 、 高山 愛望 、 中川 優子 、 松本 紀子
林谷 和織 、 小松 裕樹 、 藤倉 雄一

<舎務部>

生内 希 、 上山 真人 、 竹端 賢一 、 川村 洋二 、 伊藤 亮
和田 雅史 、 清野 恵美 、 泉波 卓也 、 猪瀬 雅法 、 藤田 美華
島野 五樹 、 松尾 晴奈 、 齊藤 直美 、 佐藤 友梨 、 川崎 真知

<行政>

雨谷 敬子 、 山崎 直樹 、 森屋 香 、 川崎 澄子 、 高野美智代
中村 和子

平成 2 6 年度 研究紀要 **創** TSUKURU 第 1 7 号

発行者 北海道今金高等養護学校長 高嶋 利次郎

発行日 平成 2 7 年 3 月 3 1 日

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

T E L (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

F A X (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2